主な記事
２面　高松教区の兄弟姉妹たち
　　ひと
　　入門者インタビュー
３面　ペトロ岐部と１８７殉教者列福式
　　委員会報告
４面　書籍紹介
　　教区・司教スケジュール

カトリック高松教区報

2009年1月1日（第127号）
発行所　カトリック高松司教区 広報委員会
〒760-0074 高松市桜町1-8-9
TEL 087-831-6659　FAX 087-833-1484
Email
教区:tkcuria@mxi.netwave.or.jp
広報:tk-koho@mxi.netwave.or.jp
生涯養成:yosei@takamatsu.catholic.ne.jp
http://www.takamatsu.catholic.ne.jp/

《2009年 年頭メッセージ》

「協力宣教司牧」の充実
建設的な意見を出し合ってみよう

主の御降誕と新年のお慶びを申し上げます

高松教区長　溝部　脩

パウロ年が続く今年、パウロの精神にそって宣教の輪を広げていく年と致しましょう。その内容については、今年一年の歩みの中で研修その他で深めていくことができるでしょう。大切なのは学ぶという姿勢を持つことです。

また今年は今まで試行錯誤で繰り返してきた「協力宣教司牧」を充実させる年と位置づけています。これはパウロ年と並行してというより、両者あいまって教区の活性化に向ける活力になるものです。このシステムにも多くの欠点や困難がありますが、それでも高松教区は「協力して宣教司牧」にあたるという路線を採用しています。司教、司祭、修道者、信徒が助け合って、知恵を出し合って教会、「神の民」をつくりあげることを目指しています。聖霊は協力しながら歩む教会を上から支えてくださいます。個人の能力には限界があります。より多くの人たちが知恵を出し合えば、閉塞状態を突破することさえ可能です。

協力宣教司牧で避けなければならないのは、従来の司祭主導型で、全てを司祭が行っていくという教会の体質です。洗礼を受けた時から、信者は祭司職、預言職、王職を受けています。今回この三つの職務について言及することはできませんが、要するに洗礼によって教会の全ての活動に参加することを意味しています。ですから、信者の側からは全てを司祭にお任せというのは問題があるし、司祭の側からは、全てを自分で行うということにも問題があります。お互いの立場があるので、その立場の中から一緒により良いものを作り上げればよいのです。そのためには、「どのような教会をもとめるのか」ということにコンセンサスが必要です。これを機会に建設的な意見を出し合ってみましょう。

パウロ年、協力宣教司牧を充実させる年ということを考える時、やはり大変な一年になります。神父様方、信者の皆様、寛大に教区の方針に協力して下さることを心よりお願いいたします。

新たな出発
―高松地区協力宣教司牧―

高松地区協力司祭　浜口末男

高松地区が協力宣教司牧態勢に入って三年が経過した。二〇〇六年一月に司祭会議が発足し、一年後の二〇〇七年二月に、信徒を含めた高松地区協力宣教司牧会議が発足した。三年間を一つの区切りとして、今年は再出発の年に出来たらと願う。

三年間、試行錯誤を繰り返しながらも、土台になるものは出来たと思う。規約が整い、これに従って、隔週ごとに司祭会議が、隔月ごとに協力宣教司牧会議が開催されている。その中から、主日ミサの当番制から始まり、合同でのサマー・キャンプ、堅信準備、黙想会、中・高生会の発足などが生まれてきた。三年間の最大の収穫は、司祭団の協力態勢が確立したことであろう。協力宣教司牧会議も軌道に乗ってきた。事情の違いを理由に、独自の路線にこだわっていればこんなにうまくはいかなかったのではないか。比較的順調に協力態勢が確立したのは、みんなが現状を打破したいという熱意を持っていたからであろう。これからも、協力宣教司牧の成否は、二つのミーティングがどのように機能するかにかかっている。今年は、新たに西讃地区が協力態勢を組むが、坂出教会の三年間の経験が大いに役立つと思う。東讃地区も全面的に協力することになっている。

今年は、メンバーも議題も重なる部分が多いため、香川地区宣教司牧評議会との合同開催を試みようとしている。うまくいくと、東讃、西讃、両協力宣教司牧ブロックが互いに刺激し合い、協力することによって、香川県全体が充実することになる。

態勢の組み換えが為される今年、新たなスタートの年として、三年間の振り返りと、現状分析からはじめたらよいと思う。

高松教区司教座聖堂桜町教会

はばたき

学校教育現場などで、「生きる力」の重要性が強調されるようになって久しい。それだけ、日本が、生きることの難しい社会になっているのだろう。

しかし、もし他者との絆という視点を欠いたままであれば、「生きる力」という言葉には、孤独感や悲壮感が漂ってしまう。自己責任の大切さや競争の意義は理解しているつもりだが、すべてを包み込む温かさがなければ、「勝ち組・負け組」の世界になってしまうのも事実である。自己責任も競争も、他者を見放したりやっつけたりするためのものではない。あくまで、他者との共生を豊かにするためのものだ。

新年にあたり、まず、自分自身がたくさんの「生かす力」に支えられていることを、じっくり味わって感謝したい。そして、自分も他者を生かすことに心がけ、小さな一歩を積み重ねてゆきたい。その積み重ねが、自分にとっての「生きる力」になるよう祈りたい。　いやいや、正月なのでもう少し欲張っても許されるだろう。神様、あなたが与えてくださっている「他者を生かしぬく力」「自分の命を生きぬく力」を、私に見つけさせてください。

パウロ年に寄せて

神の愚を生きる

ここ数年、コリントの教会への手紙を読む機会が増えました。コリントの教会がいろいろな問題を抱え込んでいたので親しみを感じていたからかもしれません。コリントの教会は、アテネのアレオパゴスで話が復活に及んだところで打ち切られ、挫折を味わったパウロによって創設された教会です。

意気消沈したパウロは、１年と６か月、コリントに留まり宣教に従事します。ここでは、アテネでの教訓が生かされます。パウロは、「知恵にあふれた言葉」によらず、「霊と力の証明による」宣教を行います。宣教が言葉による説得だけではない事に気づいたからなのでしょう。

パウロはコリントを去ります。パウロの息のかかった人たちが教会の中枢にいる間は平穏だったのかもしれません。しかし、問題が生じてきたようです。それを危惧したパウロは手紙をしたためます。

パウロは解決の基準を示します。それは世の基準とは違います。キリスト者としての基準だからです。

パウロは手紙を送り、問題の解決を図ろうとします。しかし、二度三度と手紙を送っているところを見ると解決には至らなかったようです。パウロの心中察して余りあるところですが、手紙が残っていると云う事は、私達にとってとてもありがたいと思っています。問題解決の手だてを教えてもらえるからです。

アレオパゴスの一件は、パウロの宣教を変えました。弱さの中に働く神の力を体験したからなのでしょう。パウロは「誇る者は主を誇れ」と言います。そして「弱さを誇る」と云います。「自分ではなく主を、強さ、力ではなく弱さを誇る」パウロの心を大事にしたいと思う今日この頃です。

「私の恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのである。」

（Ⅱコリント１２・９）

番町教会担当司祭　松永洋司

高松教区の兄弟姉妹たち ①

ドミニコ修道会（ロザリオ管区・カナダ管区）

このシリーズ初回は、一九〇四年から四国の司牧に情熱を傾けつづけておられるドミニコ修道会を訪ねました。

通称ドミニコ会の正式名称は「Ordo Fratrum Predicatorum（説教者修道会）」と呼ばれます。

一二〇六年に聖ドミニコによっておこされ、会としては聖ドミニコ・デ・グスマンによって創立されました。会の活動の柱は説教を通して福音を述べ知らせ、「真理」をモットーに修道院で共同生活を送りながら祈り、神学を探求し、それによって得たことや経験したことを、人々、特に神の事を知らない人々に告げ知らせる事です。

聖ヨゼフ修道院

四国での活動拠点は松山教会と共に聖心修道院、本部事務所と聖ヨゼフ修道院などがあります。現在十四名の会員は、聖ドミニコ会ファミリーの女子観想修道会、信徒会、聖ドミニコ宣教修道女会と共に、松山地区の協力宣教司牧、教育活動「愛光学園（愛光中学校・高等学校）、カタリナ学園（聖ドミニコ宣教修道女会経営＝聖カタリナ大学・短大・高校・幼稚園）、ロザリオ学園（幼稚園）」そして聖マルティン病院などの福祉活動を通して四国の宣教に邁進しておられます。

十二月十四日にはソウルに於いてユ・チョンピル新司祭の叙階式が執り行われました。この一月十日にもザヒヤ・ロファンディ新司祭が松山教会で叙階されます。特に四国のドミニコ会にとってはもちろん、高松教区にとってもこの上ない喜びです。

ユ・チョンピル師叙階式

ザヒヤ・ロファンディ師

文責＝谷口広海

カトリックの愛の教えに感動

―カトリックとの出会い―

昨年十二月二十四日、ご夫婦が改宗し、二人のお子様が受洗された桜町教会の横山英司さんにインタビューをしました。

・「カトリックの教えはあなたにどう響いていますか」

家族を大切にすること、隣人愛を持つことをとても大事にしていると思います。と言いますのは、以前のミサで「もし、家族が病気で苦しんでいるなら、ミサも大事だけれど家族を看病し、共にいてあげることを優先して下さい」という説教を聞きました。私はこれを聞いてとても感動しました。と言うのは、今までの教会の教えとは正反対だったからです。これまでは神様の前に出る事（礼拝であったり、祈祷会であったり、教会奉仕など）が最優先だと教えられてきました。ですから、私もその通りに、子供が病気であっても、妻の調子が悪いときでも、彼らから「不安だから一緒にいてほしい」と言われても「教会に行くんだから我慢しなさい」と言って、教会の祈祷会に行っていた事もありました。

妻がカトリックの大学で勉強していたこともあり、シスターでもある渡辺和子先生のお話を聞く機会がありました。・シスターはお母さまから「それでもあなたはクリスチャン?」と、よく言われていたと聞きました。私は自分の事を言われているような気がしました。

神様を大切にする事はもちろんのことですが、自分の身近な人や家族を大切にして初めて神様を大切に出来るのだと思います。こうして少しずつカトリックに惹かれていくようになりました。

・「毎日の生活の中で教えをどのように生きていこうと思いますか」

カトリックの中で学ぶ愛を、身近な人たちや家族を大切にし、「愛する力」・「影響力」である聖霊によって実践できればと思います。

・「他、いろいろと感じるところをお聞かせ下さい。」

以前、子供は礼拝には一緒には参加できませんでしたが、ミサでは一緒に与る事ができます。イエス様の周りには大人も子供もきっと一緒にいたのでは。また聖霊は物質的な「炎のような舌」だと思っていましたが、学びの中で聖霊とは「愛する力」と教えて頂きとても身近に感じる事が出来るようになりました。

「ご聖体」については、カトリックの中心だと思います。ミサに於いてご聖体が高々と挙げられるとき、まだご聖体を頂いたことはありませんが、自分の中にイエス様の体が入って来られる!!といつも涙が出そうなほど畏れと感動と感謝で胸が熱くなります。

妻もわたしも、カトリック教会に所属できることを大変うれしく思っています。今は、とても心が平安です。今までの信仰生活は、無理をしていたのかな、と思っています。カトリックの方々が温かく受け入れて下さりありがたく感謝しております。どうか家族共々よろしくお願い致します。

私達の教会にこんなに神様から愛され、神様を愛する人が与えられたことを心から喜びたいですね。

文責＝谷口広海

ひと

今年の「はばたき」を担当していただく方を紹介します。

楢林建司（ならばやしたけし）です。松山教会に所属しております。小教区で一番好きな行事は、二年前に復活したビアガーデンです。洗礼名はパウロで、親の代からの信者です。一九六二年九月十一日生まれです。趣味は、子どもと遊ぶことというか、子どもに遊んでもらうことです。

出身は兵庫県尼崎市で、一九九〇年にご縁があって松山に来ました。仕事では、愛媛大学に国際法担当の准教授として勤務しております。ここ数年、研究面より教育面での活動に関心が向いています。グループ活動主体のワークショップ型授業を導入するなど、「受講生と共に授業を創る」ことをテーマとしています。また、同僚の教員に時々授業を見に来てもらい、アドバイスを求めます。

誤解を恐れずに言えば、授業は「祭り」だと思います。その意味ではミサと共通性があります。

溝部司教様の司教紋章に表された「聖霊のもたらす一致」は、私の職業生活にも、常にインスピレーションを与えてくれています。このことに感謝しつつ、「はばたき」執筆に微力を尽くす所存です。どうかよろしくお願いいたします。お力添えください。

松山教会所属　楢林建司
愛媛大学法文学部総合政策学科
（国際法システム）

神学生だより（５）

東京カトリック神学院
哲学科２年　松田栄作

昨年は、那須から東京キャンパスへと移り、より多様な環境の中で様々な機会を通して発せられる神様の声が、振り返れば浮き彫りにされるという不思議な経験の中で多くを学ぶことのできた一年でした。

今年は、神学科へと進み福岡キャンパスへと移動します。東京と福岡の神学校が合同して一年目の年に当たります。福岡の神学生と一緒になってクラスメートが増え、神学校の名称も『日本カトリック神学校』と改められます。私自身は司祭養成の段階において助祭・司祭候補者として正式に認められローマに登録されることになります。将来聖なる叙階を受けた者として主イエスに仕え、そのからだである教会またすべての人に対して、神の業をもたらす奉仕を忠実に行うとの決意を揺るがぬものとし、さらなる熱意を持って誠実に将来への準備に励んで行かなければなりません。

昨年は１８８殉教者の列福式があり、日本の教会は喜びに溢れました。現代に生きる私たちはそのメッセージを受け取りました。天上の教会で私たちと共に信仰の道を歩んでいる彼らのことを思えば、たるんだ歩みはできません。厳しい時代に信仰を貫いた彼らの精神に倣って現代を生きることによって、周りの人々に福音をあかしすることができるのではないかと思います。新たなるこの一年を、殉教者達の毅然とした信仰と生活態度に倣い歩みを進める一年とし、司祭養成の道に置かれていることの自覚とその召命を深めたいと思います。教区の皆様からも召命の完成のためにお祈りくだされば幸いです。

『典礼奉仕』のために

高松教区典礼委員長　土屋和彦

主の御降誕と新年おめでとうございます。「典礼」の連載コラムを書きなさい、との命がありました。これからしばらく、『典礼奉仕』について小さなお話をさせていただきます。

初めにキリスト者として、また同じ信仰宣言に結ばれ、カトリック伝統を共有する、私たちの共通認識を確認しましょう。「典礼」とはいったいなんでしょうか？

Ⅰ.典礼とは？→①「神のみわざに与る」

…典礼という語はもともと「公共の事業」…という意味を持っています。キリスト教の伝承では、神の民が『神のみわざ』に参与することを意味しています。…　『カトリック教会のカテキズム』1069より

それでは、瀬戸大橋や鳴門大橋の建設、生活保護制度と「典礼」はどこが似ているのでしょうか？

「道が険しくて、私には到底行けない」「もう飢え渇ききってしまった。立ち上がれない」、こう叫ぶ人たちにとって良い知らせが届きます。「…荒地に広い道を通せ。谷は身を起こし、山と丘は身をかがめよ。険しい道は平らに、狭い道は広い谷になれ」（イザヤ40:3-4）、「主は羊飼いとして群れを養い、…子羊をふところに抱き、その母を導いて行かれる」（イザヤ40:11）　元気な人健康な人でなく、弱く病を担う貧しいこの私が呼ばれている。神の救いのみわざに与るように。

仕える典礼 ①

私たちのわざではなく、「神のみわざ」があらわされ、私たちはそれに与るように招かれています。

ということは、ギターやピアノの上手な私の、解説や小話の上手な私の、賛美歌が上手な私の、ベテランの侍者である私の『典礼奉仕』が中心ではなく、神の救い、主イエス・キリストによる救い、十字架のあがないによるすべての人の救い、「神のみわざ」が中心にあります。この素晴らしい「神のみわざ」に私たちが与るということ。

私たちが普段使っている「ミサに与る」という言葉は、実に正しく美しい言葉ではないでしょうか。

次回は、

Ⅰ．典礼とは？→②神と人々への奉仕「キリストの祭司職、預言職、王職に与る」

です。

『カトリック教会のカテキズム』1070より

ペトロ岐部と一八七殉教者列福式

高松教区巡礼団二百余人が参加

ペトロ岐部と一八七殉教者の「列福式」が十一月二十四日、小雨降る長崎県営スタジアムで、教皇代理者ジョゼ・サライバ・マルティンス枢機卿の下で執り行なわれました。

球場のスタンドとフィールド席一杯の人たち三万人が式を見守りました。そして一八八人の殉教者の列福が声高らかに宣言されました。

「わたしについて来たい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのために命を失う者は、それを得る」キリストの言葉どおりに潔く殉教した人々が、四百年の後、認められた瞬間でした。

式典は次のような順序で進行しました。

☆ **列福宣言の要請**＝日本カトリック司教協議会会長のペトロ岡田武夫東京大司教より「ベネディクト十六世教皇聖下に対し、一六〇三年から一六三九年に殉教した神のしもべ、イエズス会盛式誓願修士ペトロ・カスイ岐部司祭と一八七人の尊者を、福者の列に加えてくださるよう、ここに謹んでお願い申し上げます」と列福宣言の要請が行なわれました。

☆ **殉教者の略歴紹介**＝教皇庁列聖申請者フェルナンド・ロホ師が、殉教者の全体像の紹介、次に殉教地ゆかりの各教区司教が、その地の殉教者の紹介を行ないました。

☆ **列福宣言**＝教皇書簡「一六〇二年～一六三一年に殉教した神のしもべ、イエズス会盛式誓願修士ペトロ・カスイ岐部司祭と殉教者である以下の尊者を使徒的権威によって福者の列に加えます」が読まれたあと、各殉教者の名前が呼ばれ、最後にイエス・キリストの福音を勇気をもってあかししたこの殉教者たちの記念日は、法令の定める場所と形式に従い、毎年七月一日に祝うことにいたします。父と子と聖霊のみ名によってアーメン。と締め括られました。

☆ **肖像画の除幕式**＝祭壇上部正面に掲げられていた肖像画（長崎市の聖画画家、三牧樺子さんが描いた殉教者の肖像画）の除幕が青年十人により行なわれ、一八八羽の鳩が大空に向かって飛び立ちました。

☆ **謝辞**＝日本カトリック司教協議会会長のペトロ岡田武夫東京大司教が日本の全教会の信者を代表して、教皇聖下に対して列福の謝辞を述べられました。

☆ **閉祭**＝閉祭には、教皇代理メッセージとして前教皇庁列聖省長官のジョゼ・サライバ・マルティンス枢機卿からのメッセージと列聖列福特別委員会委員長の溝部脩高松司教が謝辞を述べて閉祭となりました。

この偉大な列福の式はカトリック教会のみならず、当日に長崎新聞の「号外」となり、また翌日の四国新聞にも八百字の活字となって写真と共に報道されました。

四国の各地からバスを列ねて参加した約二百人は予定より二時間ほど遅れて深夜～午前の帰着となりました。強行軍で、身体は疲れはてましたが、心にはそれ以上の豊かさを持って帰ることが出来ました。

桜町教会　田井貞良

あゝ、殉教の海

道後教会　丸尾修

私たち巡礼団は有明海を見降ろす丘の上に立っていた。

若者も女性たちも、老夫婦もシスターたちも、じっと、沖を見つめていた。

古巣神父の淡々とした語りが続く。命を掛けてまで守った大切なものとは何だったのか。

島原、雲仙の殉教者たちの生き様、死に様を語り続けていた。

パウロ内堀作右衛門は三人の息子とともに捕えられた。父の前で三人の息子は指を切り落とされ、船に乗せられ二月の厳寒の海へ。裸にされ、縄をつけられ海へ投げ込まれる。溺れそうになると引き上げられ、また海へ。それも父作右衛門の見ている前で。

息子は苦しみを訴えるのではなく、「お父さん、こんな大きな恵みのために神様に感謝しましょう」と言って海に沈んでいった。そんな息子たちの姿を見せられる父の思いはいかばかりだったか。それでも父作右衛門は耐え抜いて、雲仙の地獄で殉教した。

殉教の舞台となった有明海は曇り空の下でゆったりとたゆたっていた。風が公園の木々を揺らしていた。

来た時は海岸に見えていた干潟は満ち潮に覆われて見えなくなっていた。

餌をついばんでいた海鳥たちの群れもいなくなって、沖から満ちてくる潮騒がざわざわと音を立てていた。

雲仙へのバスの中でなおも声が響いていた。「お父さん、こんな大きな恵みに感謝しましょう」、「主よ憐れみたまえ」、「いと聖き聖体は讃美せられさせ給え」と。殉教者たちの射祷が、なおも私の胸を叩いていた。

有明海を望む霊丘公園にて

委員会報告

諸宗教委員会

・香川県宗教者平和懇話会が取り組んできた「平和メッセージ」が完成し、四国四県に配布された。

・諸宗教によるバチカン巡礼二〇〇九年二月七日～十四日

「人権を考える」委員会

以前教区報でお知らせしましたが、二〇〇八年度の「人権を考える」委員会の一番大きな課題は二〇〇九年の「正義と平和」全国大会を高松教区で行う準備でした。しかし、諸事情のために四国での開催は取り止めになりました。活動がまだ本格的ではない委員会にとっては安堵した結論でした。将来必ず担当することになりますが、その時また皆様のご協力をお願いすることになるでしょう。

現在外国人司牧を中心とする話し合いを継続しています。四国在住の外国人がアンケートで示してくださったニーズに応える方法、信仰教育、特に日本生まれの二世、三世の教育、小教区での共存のあり方などを検討しています。皆様からのアドバイスもお願いしたい所存です。

今年の「正義と平和」全国大会は大阪教区で行われ、委員の五名が出席しました。高松教区から他数名の出席もあって非常に意味深い時を過ごすことができました。今年のテーマだった「へだての壁を超えて」ということは人類家族の永遠の課題であることを痛感させられた大会でした。

「生きよ！殉教」は四国四県で好評

生涯養成委員会

二〇〇八年度の委員会活動の中心だった列福式に向かっての講座「生きよ！殉教」は四国全地区で行われ、大勢の参加者に恵まれたことを委員一同が深く感謝しています。各地区でたくさんの方のご協力と助けにより開くことができました。ありがとうございました。列福式の前日の巡礼地だった大村、島原と雲仙を訪ねた時または式典の中で殉教者の紹介があった時、一月からずっと聴いてきた話が生きたものとなりました。

ご承知のように二〇〇八年六月二十八日から二〇〇九年六月二十九日まで「パウロ年」と定められていますが、高松教区は一月から六月までの期間、聖パウロの書簡に記されている宣教熱意に触れたいと思い、委員会で講座などを計画する予定です。十一月末にお知らせしたとおりその第一回目は一月二十五日（日）聖パウロの回心の祝日を祝って、司教座聖堂桜町教会で行います。講師は大阪教区の和田幹男神父様です。他の地区で何かを予定したい場合お手伝いすることがありましたら是非声をかけてくださいますようにお願い申し上げます。講師として何人かの方が推薦されています。

こうして「教会」について深く考える大きな出来事二つを迎えた一年です。皆様と心を合わせて教会の信者としてより忠実にイエスに付いていく恵みが与えられますように心から祈っています。

出会いは救い

番町教会　河合　恵

新年明けましておめでとうございます。

昨年は一八八人の列福式と祝いの年でした。また、ＷＹＤ、ＷＹＤinＪＡＰＡＮもあり全国また、世界の青年と触れ合うことの出来る恵みある年でもありました。

さて、私たち高松教区の青年は、今年の六月に行なわれるあっちこっちミサの事務局として昨年の四月から活動してきました。

あっちこっちミサのテーマを「出会いは救い」に決め、テーマを中心とした分かち合いや広報誌の作成、テーマ曲の作詞・作曲と、活動も最終段階に入りつつあります。私はこれらの活動に初期の段階から関わらせて頂き、出会いは救いという言葉の意味を深く実感しています。冒頭にも書きましたがＷＹＤＪでの多くの青年との出会い。列福式という行事の出会い。なにより、あっちこっちミサと高松教区の青年達の出会い。これらの出会いは高松教区で活躍される関係者の皆様の活躍の賜物だと感じています。そして、これらの出会いに感謝すると共に、わたしも何か高松教区のために、またこれからの高松教区を担う中高生のために高松教区をもっと盛り上げていきたいと強く思います。目の前にあるあっちこっちミサの成功はもちろん、全国の皆さんが興味を持ってくださるような活動をしていきたいと思います。

体験から経験へ

高知県　石橋章洋

昨年一年を振り返って今年の抱負について書きたいと思います。

まず、四月から様々な行事がありました。子供の集い、青年と高校生の集い、ファミリーキャンプ、ＷＹＤ、教区民の集い、サレジオ会の中高生との交流、列福式そして毎月のあっちこっちミサ準備会。自分が参加した主な活動（行事）です。忙しかったけど凄く充実した一年だったと言えます。

自分が四月から青年会の活動を通して、もしくは教会に通うようになって自分の気持の変化について少し書いてみたいと思います。

最初の集いは誘われての参加でした。この頃はまだ神様がどうこうと言うより、子供達とのふれあいが中心でした。それから少しずつ神様について習い考えるようになり、ＷＹＤを体験した後では、もっと神様や聖書について知りたい、勉強したいと思うようになりました。同時に毎週のミサに行く事が楽しみと言うか、ミサを受けていないとその一週間、不安に思ってました。この頃が今年一番大きく気持に変化があったように思います。

様々な活動や勉強会で言われていたのが、体験から経験、派遣だったと思います。自分はこれがあまり出来てなかったと思います。しかし、自分が最近大事にしていることは、仕事や私生活で悩んだ時に心の中でですが祈る事です。これは四月にはなかった気持ちだったと思います。

さて、来年の抱負は、もっと大切にしたいので［祈り］にしたいと思います。その他にも

［体験～経験］、難しいと思うけど努力したいと思います。洗礼についても考えて行きたいです。

※「体験」＝日々の出来事や出会い。「経験」＝「体験」の中からその意味や学び・気付きを吸収できたもの

変革の時

坂出教会　小野雅之

当初、私は原稿の依頼を受けたときに躊躇しました。高松教区あるいは香川地区の事をあまり良く知らない者が書くような立場ではないのではないかと思ったからです。

私は香川地区信徒会の規約に則って役員に選出され、また現在の役目に就いてから二年が経過しようとしています。今まで何とかやってこれたのも他の役員の方々や各小教区の方々の快い協力と支援があったればこそと思い感謝しております。

こういう私の現状を理解して頂いたうえで感じた事を述べさせて頂くと、香川地区宣教司牧評議会と組織改定があってから、規約作成の課題を別にして当初は何を協議し合えばいいのか、どう取り組めばいいか模索していたような状態のようでした。しかしながら、溝部司教様が仰られる「一致」と言う言葉を各々真摯に受け止め、忌憚のない意見を交える協議の積み重ねの中から、次第に、それこそ内側からうごめくような感じで、少しずつ積極的に推進していこうという姿勢が見受けられるようになりなした。これには歴史的あるいは地域的な諸問題も含め何とか解決、打破して香川地区全体が一致して次なる目標へ取り組もうと言う姿勢の表れだと思います。次なる期待へ結び付けるために立ちはだかる壁を乗り越えるのに司祭評議会に求め、司教様に助言や決断を請い願うこともあるでしょう。それは、何がやれるか、何ができるか皆で考え、助け合いながら一歩一歩前へ進もうと実現へと向かう途中で不可欠な段階でもあるからだと思います。

今、香川地区は変わろう、変えようとして考え動こうとしています。

医療のともしび（12）

経管栄養と延命

諸聖人の連祷には「突然死から、主よわれらを救いたまえ」というのがあった。昔の連祷とは逆の祈りをする人は「主よわれらに突然死を与えたまえ」と言う。筆者もその一人になりたいぐらいである。

高齢者を経管栄養で延命させることは、必ずしも通常の医療とは言い切れない。場合によってそれをさしひかえても差し支えない。問題は、それが患者の尊厳を大切にしたいという意図で行われるのか、それとも単に医療費を節約したいからという動機なのかである。というのは、倫理的に見て同じ内容の行為が、意向によって違う評価を受けることがありうるのである。

たしかに肉体的な意味での生命には重要な価値があるが、決して絶対的な最高の価値ではない。ある医療手段が生物学的な意味での生命を長引かせることができるとしても、人間としての患者のためにならなければ、それを使う必要も義務も意味もないとはっきり申し上げたい。

場合によっては経管栄養を続けるべきだという結論と、場合によっては差し控えるべきだという結論もありうる。大切なのはあくまでも選択の基準と動機や意向である。（日本カトリック医師会会誌、平成１７年１２月、マシア神父論文から一部要約）詳細は会誌を御参照ください。

善通寺教会 医師 橋本 雍

投稿記事募集

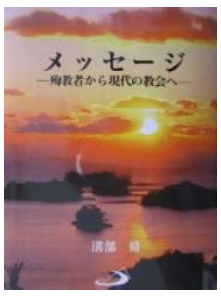
【テーマ】
テーマは、特に定めません。

【投稿要領】
字数は３００字以内（写真歓迎）
「所属教会名、住所、氏名」明記のこと。
中傷・誹謗はご遠慮下さい。
原稿はできるだけメールで送って下さい。
写真もデジカメで撮影したものはメールで送って下さい。

【投稿先】
メール：tk-koho@mxi.netwave.or.jp
郵　便：〒760-0074
高松市桜町１丁目８－９
カトリック高松司教区広報担当
ＴＥＬ：087-831-6659
ＦＡＸ：087-833-1484

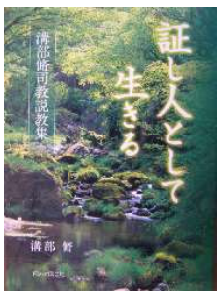
新刊・書籍・映画紹介

■「メッセージ」ー殉教者から現代の教会へ
ペトロ岐部と１８７殉教者列福式記念発行
溝部　脩 著



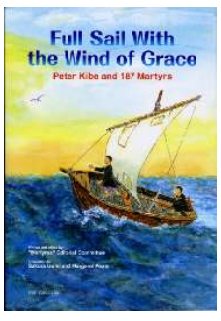
人格の尊厳、虐げられている人の代弁者、信教の自由、女性の地位の向上、子供の人権、信教分離、教育問題、福祉の問題などなど殉教者たちの生涯は、単に過去の出来事ではなく、今の日本の社会のありとあらゆる問題に光を投げかけている。サン・パウロ刊
（本体1000円＋税）

■証し人として生きる　溝部脩司教説教集
溝部　脩 著



聖書のみことば、信仰者の生き方を通して、温かくこころにしみ、時に勇気を奮い立たせる３３編の説教集。Ａ５判並製　204頁　ドン・ボスコ社刊
定価1050円
（本体1000円＋税）

■Full Sail With the Wind of Grace
Peter Kibe and 187 Martyrs
『まるちれす』編纂委員会編著 溝部脩監修
佐倉泉／マーガレット・ピート訳



『恵みの風に帆をはって』が英語版に。言葉の壁を越えて、殉教者の希望と愛の証しを世界に伝える。Ａ５判並製　オールカラー　157頁
ドン・ボスコ社刊
定価1260円
（本体1200円＋税）

■うぶ声に応えて　加藤奈智子著
助産師ひとすじ50年、若い母親への金言集

元気な赤ちゃんが生まれてほしい！助産師としての熱い想いをこの一冊に込めました。結婚前の女性に、おなかに命を授かった女性に、そして出産、育児にかかわるすべての人たちに、この本を読んでほしいのです。四六版　164頁　長崎文献社刊
定価1260円（税込）

＊＊もう読みましたか＊＊
■「殉教者を育んだ教会」

「ペトロ岐部と１８７殉教者」列福式も感動のうちに終わりました。～では、私達はどうすればいいのですか～これは私達高松教区の、いや日本のカトリック教会に課されたこれからの命題だとも言えるでしょう。昨年、一年の間１８８福者と共に信仰の在り方を考え、祈って来られたことでしょう。今年はそれを祈りのうちに形と行動に移す年になると思います。今、１８８福者は４００年の時を超えて私達の背中を押しています。それに素直に応えられるよう心を整えられれば幸いです。
高松教区広報委員会配布中

■映画「ふうけもん」

カトリック中央協議会推薦
１月１７日全国一斉公開
「親分はイエスさま」を手がけた金珍姫（キム・ジンヒ）企画

主な司教日程

1月４日(日)Ｐペドロ初ミサ参加（郡中）
10日(土)司祭叙階式
（ロファンディ師　松山）
13日(火)ウルスラ学院研修会（八戸）
16日(金)宗教者平和懇話会
18日(日)堅信式（津久見）
21日(水)キリスト教一致祈祷（坂出）
23日(金)大阪管区司教会議
25日(日)ディオゴ結城了雪記念碑建立除幕式（阿南）
29日(木)神学校合同委員会
31日(土)～１日(日)中高生のつどい（鳴門）
2月３日(火)～４日(水)教誨師全国大会
７日(金)～14日(土)ローマ巡礼、宗教者懇話会
16日(月)～20日(金)司教会議

教区スケジュール

1月１日　神の母聖マリアの大祝日
10日　ザヒャ・ロファンディ（ドミニコ会）
叙階式　於：松山
13日　司祭評議会
16日　宗教者平和懇話会
18日～25日　エキュメニカル祈祷一致週間
23日　宣教司牧評議会・役員会
25日　パウロの回心の祝日
「パウロの回心」の祝日から「パウロ年」行事計画開始
25日　ディオゴ結城了雪記念碑建立除幕式（阿南）
31日～１日　教区中高生の集い（鳴門）
2月３日　司祭評議会
７日　宗教者平和懇話会　ローマ巡礼（７日～14日）
18日　朝祷会
25日　灰の水曜日（大斉・小斉）
開催日未定　司祭集会 in カタリナセミナーハウス

――カトリック新聞購読のお願い――

カトリック新聞は、全国の教会情報やバチカンなど世界の教会の動きを伝える外電、福音解説、読者からの声などを通して、現代社会とカトリック教会の今を幅広くお伝えしています。

購読申し込みのはがきは、日本全国の教会にお配りしております。購読のお申し込みは、電話（03-5632-4432）・ＦＡＸ（03-5632-7030）で、またＥメール（kodoku@cwjpn.com）、ホームページ（www.cwjpn.com/cwjpn/）でも受け付けています。

カトリック新聞社

編集後記

新年明けましておめでとうございます。本号から紙面をＡ２の大きさにしました。（新年号だけはカラーです）

二〇〇九年の教区報の方向付けとして、溝部司教様と共に生き生きと心を一つに歩む広報を目指します。ですから、これからの高松教区をこのようにやって行きたい！という協力宣教司牧態勢に応える意見記事などを、どんどんお聞かせ下さい。心温まる話題大歓迎。毎号「宣教会や修道会の紹介」、「ひと」また「仕える典礼」コーナー等も設けました。またパウロ年（二〇〇八・六・二九～二〇〇九・六・二九）に因みパウロに学ぶ記事も一二九号（五月号）まで連載いたします。

このような方針で進めて参ります。よろしくお願い致します。

今年の広報委員会は次のメンバーで取り組みます。

担当司祭　浜口末男神父
委員長　谷口広海
副委員長　多田　洋
編集委員　和泉文男
〃　田井貞良
〃　鶴見明彦
〃　野崎悟史
〃　住吉才子
〃　中川修栄
技術委員　長谷川聖
地区委員（香川）　小野雅之
〃（愛媛）　今泉芳純
〃（高知）　宮本匡士
〃（徳島）　高田芙美
ホームページ担当　竹葉純子
顧　問　丸尾　修

本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。主の平和のうちに。

中川修栄